HAMAMATSU
GUIDE BOOK

シゴトバ
shigoto-ba

できる人ができることと、
その人だからできることを、
できるペースで
できるところ。

「しあわせ」作ってるんです。

まつぼっくり

作業スタートは毎朝9時20分。午前中のうちに約20種類、300個のパンを焼く。ていねいに計量できる人、手先が器用で成形が上手な人、パン作り20年のベテランから数年の人まで、11人全員がパン作りを分かって協力し合う、そんな雰囲気。

途切れることなく次々とパンができるよう、作る順番もパンの形も決めてある。

午後の配達はローテーションで、市内外各所に出向く。みんな配達が好きなのは「パン屋さん来てるよ」と集まるお客さんが、笑顔でパンを選んでくれるから。

私たち、しあわせを作って運んでます。

隠し味は笑顔とツッコミ。

お好み焼き
こなこな

店内にはソースの香りと食欲をそそるジュージューという音。定番の豚玉を筆頭に、たこ焼き、焼きそばといった「関西のこなもん」が人気の「お好み焼きこなこな」で、一番の人気はスタッフとの会話、そして、いい感じのツッコミ。

多いときにはお好み焼きが14〜15枚も並ぶ鉄板を挟んで、常連さんとの会話は途切れない。「ここには○○さんと話しに来てるから」なんて声も飛び出すほど。豚肉はカリッと、お好み焼きはフワッと、焼きすぎないよう絶妙の焼き加減にはつねに気を配りながら、やっぱり最後は笑顔でツッコミ入れときます。

「見えない」は「できない」では、ない。

1996年に開所した視覚障害者支援施設「ウイズ半田」。人生の途中で視覚を失った人たちの「働ける」という自信を取り戻し、社会へ送り出す役割を担う。

工夫はさまざまだ。部屋や通路をあえて狭くする。作業工程を細分化してみんなで仕事をシェアする。「音」や「段差」を活かす。スタッフが工夫して生みだした治具が、見えない彼らの作業をサポートする。まちを歩くとき、文字通り「目」となる白杖も、自分たちで作る。そのシェアは全国6割。「見えない」ならできるようにする。「どうやったら」が大切。

「見えない人」をまちで見かけたら「お手伝いしましょうか」とひとこと声を。特に、横断歩道、プラットホーム、工事中の場所。同じ歩幅で付き添ってください。

ウイズ半田

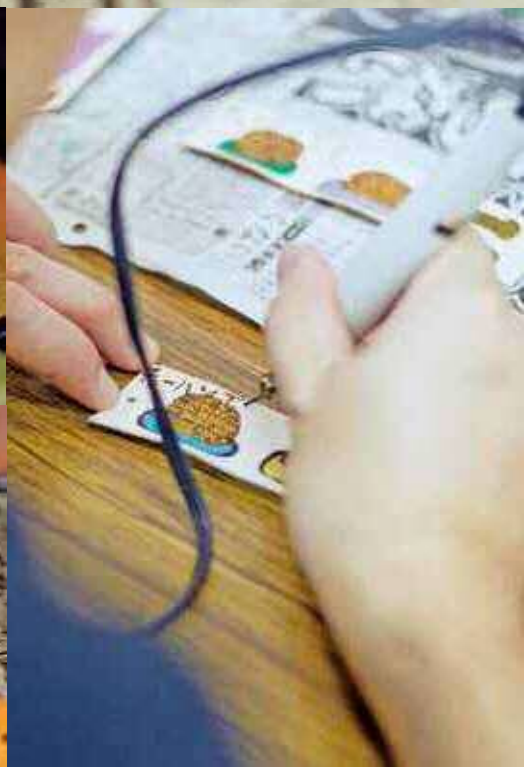
せんたくばさみをつくる男。

かがやき・しばたさん

天竜川のほとりにある「かがやき」。ここに「洗濯ばさみ作りのエキスパート」がいる。名前はしばたさん。

しばたさんが仕事を始めるには、ちょっとした決まりごとが必要だ。施設長の稲垣さんに頭をなでてもらうこと。稲垣さんのヒゲを1本抜き、自分のヒゲが生えていないか稲垣さんに確かめてもらうこと。ちょっと面白くてあったかい「セレモニー」を経て、しばたさんは作業モードに移る。

専用の器具を使い、金属の輪を広げてプラスチックのパーツに通すのもお手のもの。お気に入りは青と緑。何色をいくつ作るかは、しばたさんの気分次第。洗濯ばさみのエキスパートは、この日も黙々と、自分だけのペースで洗濯ばさみを作る。



好きなものを書いているんです。

かがやき・ますださん

「コーヒーです。」
「紅茶です。」

レザーの焦げる匂いに満ちるシゴトバで、黙々と作業をするのは、ますださん。革の上に電気ペンで描かれるシンプルな文字や絵は、彼の好きなものばかり。いろいろな飲物。車。動物。家。家電。「○○です。」で完結するところまでが、ますださんのこだわり。レザー用の染料で色を付けたキーホルダーやしおりには、隠れファンも多いんだとか。

一度、会ったら質問してみてください。実はますださん、13画の漢字にとても詳しい。いろんな漢字を教えてくれるはずです。

障がい者と共に働くということ。

こころいろ

障がい者はみんな素直で一生懸命。なぜみんな障がい者を雇わないんだろう。それが「こころいろ」施設長・永井さんの素朴な疑問だ。

企業の下請として自動車部品の組み立て作業を請け負い、一般就労を目指して働いている。1日4時間労働。仕事の内容は誰がやっても不良にならないシンプルなものを永井さん自ら探してくる。いつも呼びかけているのは、心を落ちつかせて働くことと、家族に感謝すること。ときには悩みごとの相談に乗ったりカラオケに行くこともある。

なかなか職場になじめなかった従業員がある日「こころいろ」の歌を作ってきた。毎日「一緒に働きたい」と訴えていた永井さんの言葉が織り込まれていた。コツコツと伝え続けてきたココロが、確かに届いていたのだ。

「どんな障がい者にも仕事を与えられる自信がある」と永井さんは胸を張る。誰だって、何かできる。障がい者と一緒に働くって、そういうことなのだ。